

書 評

書 評

Juan M. Hernández-Campoy and J. Camilo Conde-Silvestere, eds.
The Handbook of Historical Sociolinguistics.
 Chichester: Willey-Blackwell, 2012.
 xxx+674 pp.

Suzanne Romaine は著書 *Socio-Historical Linguistics: Its Status and Methodology* (1982) において、社会言語学的モデルを歴史的データに当てはめるといふ革新的な研究成果を発表した。その後、30年の間に、コンピュータによるデータ処理が現れ、ジャンル、方言、書き手、そして日付などを表す膨大な歴史的コーパスが編纂され、データが断片的であるという本分野における問題が解消された。Romaine の研究から30年たった今、このハンドブックは、歴史社会言語学という学問分野の力強さを立証するものである。国際的に著名である投稿者の世界各国からの論文を集めた本書は、この分野の包括的で有益である参考書であり、歴史的または非歴史的な社会言語学、言語と方言の接触、そして言語変化を扱う研究者、あるいは上級の学生に向けられたハンドブックである。

本稿においては、まず序章(Introduction)をまとめて本書を概観する。その後、通時的研究と共時的研究の関係に関する第1章、社会的ネットワークと言語変化の関係に関する第18章、そして言語の拡散に関する第23章につ

いてその骨子を紹介する。

“Introduction” by J. Camilo Conde-Silvestere & Juan M. Hernández-Campoy

ここでは、歴史社会言語学の目的とこれまでの成果が述べられている。まず、Romaine (1982: x) の言葉を借りて、歴史社会言語学の本来の目的は「ある社会集団において時間とともに多様性が生ずる可能性がある言語の形や用法の説明をすること」(本書: 1) と述べている。現在この分野は、多くの研究者の貢献により成熟の時を迎えており、目的はさらに広範囲に及んで「社会文化的文脈に照らして言語の歴史を再構築すること」となっている。また、この学問分野の発展によって、言語システムの革新が話し手の社会歴史的な状況に対する組織的なつながりの中で起きているということが明らかになったと述べている。

次に、この学問分野の最も価値のある達成の一つは言語研究における現在と過去の間の対話を豊かにすることでであると述べられている。つまり、共時的レベルの研究の発展が、よりよい通時的な理解を導くかもしれないし、逆もあるかも知れないということを、歴史社会言語学は明らかにしたのである。

しかし、Labov (1994: 11) が批判しているように「悪いデータを最大限に使う (making the best use of bad data)」ことが、これまでの歴史社会言語学の問題として指摘されている。

つまり、残っている過去の書かれた資料というものはしばしば偶然に残っているものであり、やり取りの直接の背景から切り離されたものとなっているため、それらの資料が本来どのように書かれてどのように受け取られたかという社会的・文体的文脈は実際には再構成され得ないのである。

このような困難を克服することができたのは、並行する他の研究分野であるコーパス言語学や社会史の発達が助けとなったからである。まず、コンピュータ技術の発達、および大きな電子コーパスの編纂により、「過去の悪いデータ」（本書：3）で研究するという問題のいくつかを克服することができた。同様に、社会歴史学者の過去のグループや地域社会に対する興味によって、時代錯誤的ではない信頼できる現代の証拠を使って、過去の言語推移を動機付けたと考えられる社会歴史的な環境を再構築することができたのである。

そして、これら必須の「実証的」、「歴史的」妥当性を得ると、ほとんどの歴史社会言語学の研究は、歴史の中のある時代において十分に観察された言語変化と、その時代の社会の相関関係を組織的に再構築するために利用されるようになった。この面では、過去のデータは社会言語学的な変数、つまり、年齢、社会的地位、職歴・学歴、性、居住地、移民の歴史、人間関係のネットワークといった社会人口統計学的な要素だけではなく、時間や場所における

言語の歴史的变化の拡散に関係する要素にも関係づけられてきている。

以下では、このハンドブックの目的と章構成が示されている。まず目的は、「歴史的な言語の変化や発達の説明をするために、社会言語学の理論モデル、方法論、発見、そして専門知識が、どの程度まで過去の言語の復元の過程に適用できるかの、最新で深い探求を示すことである」（本書：4）と述べられている。次に章構成が以下のように示されている。

- パート1：歴史社会言語学という学問分野の起源と動機付けが概説される。（第1～3章）
- パート2：歴史社会言語学者の用いる方法論について調査する。（第4～11章）
- パート3：歴史社会言語学が、過去の社会的変化と言語的变化の間にある調和を、社会言語学的変化の観点から調べ、位置づけ、記述し、説明できることを示す。（第12～19章）
- パート4：時代を通じた地理的・社会的な動きの中にある、言語や方言の様々な面を解きほぐそうとする著者の論文を集めている。（第20～30章）
- パート5：言語の多様性に対する言語専門家態度という要素が、特に19世紀以降の純粋主義や規範主義の発達にど

のように関わってきたのかを示す。(第31～35章)

本書では、英語が研究対象として優勢であるが、世界中の30の各地域の大学から著者が参加して、インド・ヨーロッパ人、又は非インド・ヨーロッパ人という他の言語も調査の対象となっており、多様な組織において、この新しい学問の限界を試している。

第1章 “Diachrony vs Synchrony: the Complementary Evolution of Two (Ir)reconcilable Dimensions” by Jean Aitchison

この章では、通時的、共時的という、かつて水と油のような区別であったものが、歴史社会言語学の学問分野においてどのように相互補完的な発達を経て統合されてきているのかが、研究方法の発達とともに説明されている。

1. 19世紀、20世紀初頭¹

通時的研究は共時的研究から分けられなければならないという独断的な記述はソシュールの死後、学生の講義ノートを集めた著書 *Cours de Linguistique Générale* (1915) による。しかしこの2つの関係は、言語学の関心事が変わるにつれて変化してきた。ソシュールの著書が出される以前の19世紀は歴史的研究の方が注目されていた。1870年ごろのLeipzigを中心とする学者グループであ

る青年文法家 (neogrammarians) が音声は例外なく機械的に変化するという見方を推し進めた。その後、20世紀の半分以上は、言語学者の多くは共時的研究に集中した。これは歴史的な固執を反映するものであり、消えてしまいそうな当時の言語の記述を後世のために残すことを急いだからだ。しかし20世紀初頭の共時的記述は不適切であった。これは文体のバリエーションを無視し、クリアカットであることに重点を置いて、変化を研究する際に必要な多様性や不明瞭さを無視したためであった。

2. William Labov のこの分野への貢献

このような状況を変化させたのは、社会言語学者 William Labov である。彼は1960年代に通時的研究・共時的研究に革新的な方法で近づき、歴史言語学を新しい方向へと向けた。彼は完了した変化だけでなく、起こりつつある変化、つまり変化の中間段階にも目を向ける必要があることを指摘したのである。

Labov (1965/1972) は、12の音声の変化を概説した。その内の3つはアメリカ東海岸沖の島にある田舎であるマーサのブドウ園において、そして、9つは都会であるニューヨーク市におけるものであった。連続する2世代の音声の違いについて、過去の文学作品

¹ この章には Conclusion 以外の節が示されないため、小見出しを付加した。

に基づく第1世代のデータと彼自身が集めた第2世代のデータを比較することによって明らかにしている。彼は発音の細かいシステムの変化は、他の言語特徴に比べて急速に変化すること、また、1語1語というより、同種の語彙全体が変化の影響を受けることを指摘している。

また、彼は起こっている変化を記録するのみならず、この研究をどのように行うかを提案した。まず、ニューヨークで地域、年齢、民族、社会的地位などのバランスのとれた人々、そしてその人々の様々なスピーチスタイルのサンプルをとった。しかし、打ち解けたスピーチの記録が難しかったので、インタビューの際にいくつかの工夫をした。例えば、インフォーマントは恐ろしいエピソードについて話すとき、また、特に女性は電話を受けたり子供に話しかけたりするときに打ち解けたスピーチになることを念頭に置いて質問した。話したい内容を持っている人には、その話へ脱線させることにより打ち解けたスピーチを引き出すことができた。

Labovによる研究は若い世代を刺激して、変化を研究させた。Bailey(2002: 312)は、進みつつある言語変化の研究に対して「共時的アプローチ」を適用することは、言語の多様性や変化における研究の土台を形作っている」とLabovの研究を評価している。

しかし、これで共時的・通時的の問題がすべて解決したわけではなかった。Labovはあるコミュニティの中の人から

人へと移る変化について主に見てきたにすぎない。現在では、ある言語全体の変化の過程に対する注目が必要である。

3. 文法化について

「文法化」は通時的と共時的の関係に対して重要な意味を持つ、さらに進んだ主題である。これはMillet(1912/1948)によって作られた言葉である。彼は文法化を「ある文法的な特質を本来独立していた語に付加すること」(Millet: 131)と定義している。例えば、本来独立していたgoがbe going toの一部となり、文法的な働きを得ることである。

しかし、通時的・共時的に関係する面から見ると、重要なのは文法化という発達過程の様々なステージは一般的に重なりを持つという点である。Lichtenberk(1991: 38)は「十分時間を与えられれば、一つの構造はもう一つの構造に取り換えられるかもしれないが、通常は新しい構造と古い構造が相当の時間共存している」と述べている。

文法化では、含まれる意味概念は言語を超えて同じような発達をする。たとえば、多くの言語で「能力」はしばしば「許可」の意味へと発展する。英語では法助動詞canがこれにあたるが、これら2つの意味は共存している。このタイプの発達の決定的な側面は、私たちが共時的な状態を扱っているのか、それとも通時的な出来事を扱っているのか、知ることが不可能で

あるということだ。

4. Conclusion

以上、かつて重んじられていた通時的と共時的の間の方法論的な区別が、次第により不鮮明になった過程が本章において示された。これには、Labovの研究が変化の中間段階を捉える手法の土台を作り、文化理論が通時的には変化であるものを共時的には多様性として捉えられるようにしたことが大いに関係していた。つまり、「通時的の研究と共時的研究が相いれないということではなく、それらは重なり合った過程であり、一方がなければ他方が理解できない」(本書：19)ということが示された。

第18章 “The Role of Social Networks and Mobility in Diachronic Sociolinguistics” by Juan Camilo Conde-Silvestre

この章では、個人間の結びつきの強さ、および多重性が、言語変化の拡散にどのように影響しているかを説明している。

1. The Social Network Hypothesis in Sociolinguistic Research

1970年後半、「社会的つながり (social network)」が、年齢、性、人種、社会経済的地位、文体などの社会言語学における研究の一要素として新しく加わった。このつながりには関係の長さ、会う頻度、感情的強さ、親密性、相互作用、どんな関係かなどの要素による

「強・弱」「濃い・薄い」、職場、近所、友達、親戚、家族などのグループによる「多重・一重」の差がある。

James and Lesley Milroy (1985)はこの考えを1975年から1982年の間のBelfastの言語の異形と変化を説明する際に用いた。話し手の間のつながりが濃く、多重的であり、ネットワークが強いつながりである場合には外部からの変化や革新は拒まれる。しかしその中で弱い一重の結びつきしか持たず、他の社会的ネットワークとも接触して新しい形をグループに持ち込む「革新者 (innovator)」も存在する。一方でグループの中心的存在でありながらも新しい形を使い始める「早期受容者 (early adopter)」が存在し、彼らは革新者と弱い結びつきを作る。したがって、早期受容者によって一度革新が受け入れられると、革新者の影響力により、その革新はネットワークの中心から外へ向かって広がって再び周辺へ行き、今度は他のネットワークの周辺の人との弱い結びつきを介して他のネットワークへと広がるのである。

2. The Social Network Hypothesis in Historical Sociolinguistic Research

社会ネットワークには、Barnes (1972)によって作られた「自己中心的 (ego-centric)」と「社会中心的 (socio-centric)」の区別がある。前者はある人物を中心としたあらゆるつながりを点と線で再現したモデルである。また、後者は必

ずしも個人のつながりを必要とせず、都市への人口の流入など、あるグループや人々の行動を包括的にとらえたものである。

2.1 From the typological to the socio-centric approach

社会中心的ネットワークの考え方の集団のタイプへの適用の一例として、ここではロンドンにおける人口統計上の変化と言語変化との結びつきが、イースト・アングリア、および北部との比較を通して指摘されている。ロンドンの急速な人口増加は14世紀から18世紀の北部からの移民や、政治、法律、商業、出世のために一時的に居住する人々による。このような流動的で弱い結びつきのネットワークができたロンドンでは言語変化の拡散が起こりやすくなり、元来目的格であったが主格として使われるようになった *you* が1520-59年の間にいち早くその頻度を増している。また、もともと北部で使われていた *-(e)s* が、1579-1660にかけてロンドンで急速にその頻度を増し、北部を追い越している (p. 339, 図18.1, および図18.2参照)。

2.2 From the socio-centric to the ego-centric application of social networks in historical sociolinguistic research

Alexander Bergs (2000, 2005) は15世紀の代表的な書簡集である『パストン家書簡集』を吟味することによって、

ノーフォークのパストン家のメンバーの典型的なネットワーク構造を完全に再構築した。人物毎の言語使用に関係すると思われる伝記的な特徴を明らかにし、後期中英語期から初期近代英語期の歴史的な言語変化に結び付けた。この研究はネットワーク内での相互作用的な要素を考慮していないため、明らかに社会中心的分析であった。

しかしこの研究は、明らかに自己中心的なモデルへと発展する。なぜなら、話し手を取り囲む個人的、社会的環境と実際の言語的ふるまいを関連させて、あるメンバーが革新者であるかどうか想定できるからである。つまりこのような伝記的調査により、「固い・緩い」「強い・弱い」「一重・多重」などといった各メンバーの「個人」としてのネットワークへの関わりがある程度想定できるのである。Bergs は(a)~(g)の「試験的なネットワークチェックリスト」(例えば「(a)性：男性は弱い一重の結びつきを薄いネットワークの中で作る」, 「(b)教育と教養のレベル：教養があると人との接触が増え、役割を持つ。また、多くの弱いつながりを薄いネットワークの中で作る」など)を作って調査した。

Bergs によって分析された一つの言語的革新はパストン家の手紙における *wh-* 型の関係代名詞の拡散である。341ページの表18.1はその家族の世代ごとの中英語期の進行中の変化の度合いを示したものである。表中では、第1世代 (アグネス, ウィリアム1世),

第2世代(ウィリアム2世, ジョン1世, マーガレット), 第3世代(ジョン2世, ジョン3世, エドモンド2世, ウォルター, ウィリアム3世)といった, パストン家の主要メンバーである3世代10人の関係代名詞の使用に着目し, 当時一般的な *that* と, 新しい *wh-* 型の *which*, *the which*, *whose*, *whom*, *who* の使用率がそれぞれ表示されている。さらに, それぞれの人物において, 中英語で通常使われた *that* の出現率を *wh-* 型の出現率の総数で割った数値である “ratio” が表示してあり, この数値が小さければより革新的な人物であることが示されている。ここで第3世代の人物の数値が小さく, より革新的であることがわかる。

ここでは特に, 3兄弟である第3世代のジョン・パストン2世, ジョン・パストン3世, エドモンド・パストン2世の *ratio* の違いが彼らの伝記的特徴から詳しく説明されている。ジョン・パストン2世 (1.07) とジョン・パストン3世 (1.26) は頻繁に移動したことにより, 緩く弱い一重の結びつきを得て革新的になった。それに対し, エドモンド・パストン2世 (0.43) は, おそらくケンブリッジとロンドンのステープル・インで教育を受け, そこで初めてこれから標準になってゆく新しい言語の傾向に出会ったために革新的になったのである。

また, この3人と比較して, その母親のマーガレット・パストンの *ratio* が3.29で, 保守的であることが示され

ている。これは彼女が女性であったため高い教育を受けられず, 一生を通して家族が所属集団であり, 地理的にもほとんど移動がなかったため, 彼女のソーシャル・ネットワークが非常に強く強い多重の結びつきを持っていたからであると推測される。

2.3 Ego-centric applications of social networks in historical sociolinguistic research

ここでは Fitzmaurice (2000a) による *The Spectator* 誌に参加していた政治家や作家たちの人間関係の分析が一例として挙げられている。346ページの図18.31は, この連合を, 点と線で表された「自己中心的 (ego-centric) モデル」で示している。中心人物である Addison が中心に位置している。Addison と Steele は学生時代から友達で, *The Spectator* 誌でも協力をして成果を挙げ, 地理的にも近かったので, 彼らの友情はさらに強くなっている。このような近さは太い両矢印で示されている。Addison と Wortley も似たような強い関係だが, 地理的な近さはないので矢印が長くなっている。また, 片方の矢印が Pope から Addison へと出ているが, 彼は Addison のような影響力のある作家の庇護を受けたいと思っていたのである。

Fitzmaurice はこの連合のメンバーの手紙における関係代名詞の分布に着目した。1700年代には疑問代名詞 *who(m)* と *which* は関係詞としての機

能を十分確立していたが、それらは that やゼロ関係詞とも共存していた。文法学者は皆、ゼロ関係詞や that には否定的であった。この連合の中において、Steele, Congreve, そして Addison は文法学者の意見へ固執する傾向が見られた。特に Congreve はより新しい形である who (m) と which を多く使って、ゼロ関係詞は意図的に避けていた。彼はグループ内では周辺に位置しており、Addison と Lord Halifax としか強いつながりを持たなかった。また彼は政治家と関係を持ったり、文学、劇、宮廷などの輪に入っていたりと広い接点を持つ人であった。そのような弱いつながりを通して、彼は言語の革新に近づくことができた。一方 Addison は早期受容者(early adopter) の役割をして、Congreve のような周辺的なメンバーから革新(innovation) を取り入れ、また中心人物であるので他の者にもその革新を拡散させたのである。

第23章 “The Timing of Language Change” by Mieko Ogura

この章では、一定時間において、語彙の変化がどのように拡散するかを、頻度と社会的ネットワークという2つの観点に基づき説明している。その際、拡散の速度の変化の度合いの移り変わりを Sカーブ曲線を想定して表している。事例として、疑問文や否定文における単純形 (simple form) から do 迂言形への交代を頻度の観点に立ち、ま

た、3人称単数現在の動詞語尾 -(e)th から -(e)s への交代を社会ネットワークの観点に立ち、歴史的に考察している。

1. Introduction

まず、ここでは基本的な予備知識を提示している。

多量のデータに基づいた40年以上の経験的調査により、音声だけでなく語彙も徐々に語彙項目を超えて拡散する過程があるに違いないことが想定されている。この過程を Wang(1969)は「語彙拡散 (lexical diffusion)」と呼んでいる。

年代順の語彙拡散のグラフは Sカーブ曲線で表される。言語に最初に変化が起こるときは、その語彙数は少ない。しかし中盤でスピードが上がり、再び段々と速度を落として最後には次第に弱まる。

また、語彙拡散は2つの面から規定されることが指摘されている。W(ord)-diffusion は語から語への拡散であり、do 迂言形や -(e)s 語尾の言語的特徴が色々な動詞へ拡散することなどである。一方 S(peaker)-diffusion はそのような言語的特徴の話者から話者への拡散である。

2. S-curve Progress, Snowball Effect, and Word Frequency in W-diffusion

次に W(ord)-diffusion に関する Sカーブが扱われている。その際に英語の歴史的データについて議論が行われる。また、加速度的効果 (snowball effect) についても論じられる。つまり、変化

の始まりが遅くなればなるほど、より多くの語が一度に変化して、変化の際速度が増すということが示されている。また、語の頻度と変化の関係についても考察されている。

2.1 The development of periphrastic do
431ページの図23.2は Ellegård (1953) による肯定平叙文、否定平叙文、否定疑問文、肯定疑問文、否定命令文に関する、do を使わない単純形 (simple forms) から do を使った迂言形 (do-forms) への変化率を年代ごとに表したよく知られたグラフである。この元となるデータ (p. 430, 表23.1を参照) は432ページの表23.2のように「頻度のロジスティック変換 (logistic transform of frequency)」により比較しやすい一次関数の直線における傾き (slope) と切片 (intercept) に集約することができる。² この表において、肯定平叙文の傾き (3.41) が最も小さく、否定平叙文 (5.90)、否定疑問文 (6.90)、肯定疑問文 (7.73)、そして否定命令文 (13.44) の順で傾きが大きくなっている。これは、Visser (1963-73: 1411-76) の歴史的観点からの指摘に一致している。つまり、最初に do 迂言形が使われ始めたのは、肯定平叙文 (1175年頃) で、その後、否定平叙文 (1280年頃)、否定疑問文 (1370年頃)、肯定疑問文 (1380年頃)、そして否定命令文 (1422年頃) と続く。これらの

ことから、変化が始まるのが遅い文の形ほど一次関数の直線の傾きが急で変化の割合が大きいたことが指摘されている。

また、同様の手法により、wh-疑問文において、頻度の高い say, mean, do, think といった動詞は do 形迂言になることに抵抗するが、一度変化が始まると、その変化の割合は頻度の低い動詞よりも大きくなることが示されている。さらにここでは、否定平叙文において、頻度の高い know, do, doubt, care, list, fear の do 迂言形の出現が、それ以外の動詞に対して200年も遅れていることも指摘されている。

2.2 The development of -s in the third person singular present indicative
ここでは、語の頻度と時代の相互作用や加速度的効果 (snowball effect) が見られる例として、3人称単数現在の場合の動詞の語尾である従来の -(e)th 形から新しい -(e)s 形への変化が着目されている。436ページの表23.8では、ヘルシンキコーパスの初期近代英語 (EModE: 1500-1710年) のデータを3期 (EModE I: 1500-1570年, EModE II: 1570-1640年, EModE III: 1640-1710年) に分けて、それぞれの期間における動詞の語尾に着目している。その際、動詞を頻度別の3つのグループ (1084-21回, 20-3回, 2-1回) に分けて調査している。まず I 期では、do, have, say の含まれる最も頻度の高い

² このような統計学的なデータ操作については、宮川 (1999: 62-67) を参照。

1084-21回の頻度幅のグループで使われる動詞の中に -(e)s 形が最も多く見られる。II期になると、2番目に頻度の高い20-3回の頻度の動詞のグループで37%で最も頻度が高くなる。III期では、最も頻度の低い1-2回の頻度の動詞グループで急激に -(e)s の割合が増えている一方で、最も頻度の高い動詞グループでは、いまだに -(e)th の割合が高いことがうかがわれる。このように、変化が早く始まったグループでは、変化の割合は緩やかで、逆に、変化が遅く始まったグループでは、変化の割合は急激になる傾向を示している。これは、理想形として437ページの図23.3で示される Sカーブのバリエーションに対応している。

3. Social Networks in S-diffusion

3.1 Social networks

ここでは、S(peaker)-diffusion に関係する社会ネットワークが扱われている。どのように社会ネットワークの異なった構造が機能的、社会的に変化に偏り(バイアス)をもたらすかが、模擬実験と歴史的データに基づいて示されている。筆者は、この研究は最近開発されたネットワーク理論と大規模な歴史的変化を結びつけた最初のものであると主張している。

ここでは、後述3.2の模擬実験に使用するためのネットワークモデルが説明されている。まず Watts and Strogatz (1998) の提案したスモールワールドネットワーク (p. 440, 図23.4(b)参照)

が説明されている。このモデルは、円状に並んだ10個の点のそれぞれの隣同志と一つ飛ばした隣同志を規則的に線でつないだレギュラーネットワーク(図23.4(a)参照)を作り、そのいくつかのつながりの線を選んで別の交点にランダムにつなぎ直して作る。よって、隣同志がつながっていない場合もある。一方、長距離であっても直接のつながりは情報伝達等の近道になる。

次に、Barabási and Albert (1999) が提案したスケールフリーネットワーク(図23.4(d)参照)が同様に説明されている。これは Erdos and Rényi (1959) による、交点をランダムにつないだランダムネットワーク(図23.4(c)参照)と、Granovetter (1973) のかたまりの社会 (clustered society) を合わせたものである。各交点は初めは小さな中心だが、新しい交点を加えることで拡大する。その際、新しい交点はつながりをより多くもつ交点とつながりやすいため、ネットワークの中に中枢となるいくつかの点ができる。

3.2 Computational modeling of social networks and language change

ここでは、3.1で示された社会的ネットワークの中で、どのように言語変化が受け入れられるかについての模擬実験が行われるが、まずそのためのバイアスが設定されている。「機能的バイアス」は学習者が言語を学ぶ際により適切である形を無意識的、非意図的に選択するという偏りである。これは、

中英語期の名詞と動詞において、より簡単な異形が選ばれることで進んだ屈折の簡略化などの際に働く。それに対して「社会的バイアス」は、個人間の意図的な相互作用による偏りである。これは、社会的に影響のある人と接触して模倣する場合、もしくは後述3.4.1のように他の国の支配下にありやむを得ず模倣する場合などに働く。

次に模擬実験の結果として、前述の4つのネットワークタイプ（レギュラー、スモールワールド、ランダム、スケールフリー）の集団に関して、3つの条件における変化の拡散の型が、計12個のグラフで表わされている（pp. 443-44, 図23.6参照）。それぞれのグラフは各集団の世代が進むにつれて変化率がどの程度に上昇するかを示す。なお、3つの条件とは、最も機能的または社会的バイアス（B）が強く革新者（I）の数が少ない「条件1（B=20, I=1）」、中間の「条件2（B=10, I=10）」、そして機能的または社会的バイアスが最も弱く革新者の数が多い「条件3（B=2, I=100）」である。これらの条件においてなされた20回の試行の結果がグラフで表されている。ここで、スモールワールドネットワークとスケールフリーネットワークの結果をそれぞれの条件ごとに比較する。条件1のように機能的または社会的バイアスが強い場合、変化率のグラフはどちらのネットワークにおいても急なSカーブで上昇する。一方、条件3のように機能的または社会的バイアスが弱

くなると、スモールワールドネットワークでは変化率のカーブ緩やかになる。さらにスケールフリーネットワークでは、変化率が上昇せずに、拡散が失敗する場合も多く見られる。

3.3 Case studies: functionally biased change

ここでは、言語選択が異形の中から学習者によって無意識的に行われる機能的選択について述べられている。13世紀から16世紀の大母音推移、古英語期のOVからVOへの語順の変化などを挙げ、そのようなゆっくりとした変化においては「機能的バイアス」は緩やかにかかるのみであり、ロンドンと他の地方の間に変化の差が見られないことを指摘している。逆に、国中で急速な変化の拡散がある場合にはより強い機能的バイアスがかかっていることを指摘している。

3.4 Case studies: socially biased change

以下では、社会的要因から起こる変化について、2つの事例を挙げて説明している。

3.4.1 Change by socially influential people

一つの例はマーシア方言を話す地域の、西ゲルマン語の鼻音の前のaの変化である。Toon (1983) はマーシアでのこのaのoへの変化を発見したが、マーシアの統治していた803年から824年の間のケントの証文において同様の

変化が見られたため、マーシアの政治的統治がケントの言語変化に影響したと想定した。このような共存のない a から o の急速な変化は強い「社会的バイアス」があることを示唆している。この変化は前述3.2の模擬実験における条件1の事例と一致している。つまり、ネットワーク構造は変化の拡散に影響していないのである。なお、マーシアの影響力が衰え始めた833年以降は、ケントにおいて a と o の間に再び不安定さが確認されたことが指摘されている。

3.4.2 Change by a massive immigration flow

もう一つの例は、have と do を除く動詞の -(e)s 語尾の発達である。446ページの図23.7は、縦軸に動詞語尾の -(e)th から -(e)s への変化率、横軸に幅を持った年代（1460-1499年、1500-1539年、1540-1579年、1580-1619年、1620-1659年、1660-1681年）がそれぞれ示されたグラフである。ここでは、ロンドン、宮廷、北部、イースト・アングリアの各地域の各年代における変化率の推移が示されている。このグラフからは、ネットワーク構造の違いの影響を読み取ることができる。

グラフの最初の15世紀後半（1460-1499）においては、-(e)s は北部とロンドンで高い割合になっているが（北部約60%、ロンドン約30%）、16世紀の前半には、その割合が急激に下降している（北部約20%、ロンドン約0%）。

これは、北部において、ロンドンの上流階級の影響のある人々によってもたらされた変化であると思われる。

その後、ロンドンで -(e)s の拡散が始まるまでに1500-39年から1580-1619年という約80年を要した。これは上流階級が -(e)th 形を使い続けていたためである。また、当時ロンドンに移住する人々には北部からの見習い工が多く少数の師匠につくため、スケールフリーネットワークが形成され、さらに社会的バイアスがほとんどなく、-(e)s の拡散が失敗する可能性が高くなったためでもある（前述3.2の模擬実験における条件3のスケールフリーネットワークの結果を参照）。

しかし、1580-1619年から1620-59年までの間に -(e)s の拡散は勢いを増した。これは16世紀後半から17世紀にかけて、北部からロンドンへの移住者が特に増えたためである。宮廷は -(e)s 形を受け入れ始めるのに時間がかかったが、一度変化が始まると、より速く変化した。これは加速度的効果（snowball effect）を表している。

一方北部では -(e)s 形は早い段階（1540-1579年）から緩やかに増しており、Sカーブのロンドン、宮廷、イースト・アングリアとは異なっている。これは、北部にはグループ内での伝達が速いスモールワールドネットワークが存在していたからだと思われる。

<まとめ>

以上、歴史社会言語学の包括的なハンドブックである本書の序章、第1章、第18章、および第23章を紹介した。本研究分野はコンピュータが現れてから急速に発達し、膨大な歴史的コーパスの利用、およびデータ処理の助けを得て、共時的研究と通時的研究の垣根を超えるような強力な研究分野となったことが示されている。ここで取り上げた統計処理、およびネットワーク理論などのツールは、言語変化研究に対する大きな可能性を与えている。

このような新しい手法によって、今後、従来の研究が再解釈されるのみならず、新たなデータをもとにさらに新しい発見がなされる可能性がある。し

かしながら、コーパスで膨大なデータを利用するという性質上、この手法の適用は主として形式面の研究に適していると思われる。そこで、さらに詳しいタグ付きコーパスなどの編纂が進み、意味論的な研究に十分利用できる程度までこの手法の適用範囲が広がることを期待する。

参考文献

- 宮川公男、『基本統計学』（第3版）.
東京：有斐閣，1999年.
Romaine, S. *Socio-historical Linguistics: Its Status and Methodology*.
Cambridge: Cambridge University Press, 1982.

平山 直樹（尾道市立大学）